

2019年2月22日(金)

静岡県加藤学園視察、座談会

恒川和久(名古屋大学)、脇坂圭一(静岡理工科大学)、野澤英希(愛知工業大学)、柴田樹人(名古屋大学恒川研 M1)

■はじめに～第一印象

恒川) この加藤学園は1972年に楨文彦氏の設計で建てられました。アメリカ帰りで40代前半の楨さんが、日本で初めてのオープンスクールに果敢にチャレンジした、オープンスクールの第1号として記念碑的な作品です。我々3人とも訪れたのは初めてですが、まずは空間の第一印象をそれぞれ話して、そこからオープンスクールのシステムや、個々の空間の質の話をしていきましょう。

脇坂) 参考に、文化庁で進めている近現代建造物緊急調査リスト(資料を手渡す)をお見せします。革新性、意匠性、作家性、技術性、時代性、地域性、継続性、の7つ評価軸があげられています。どれが長けているか、もしくはそれらのバランスで建築を評価していこうとしています。加藤学園をみたときに、空間技術として、壁を無くしたことは革新的、技術的な点です。意匠として、楨さんの作風がありながら、スーパーグラフィックを組み入れていたり、楨さんらしくないところもある。小学生の生活する場として、近代建築を学んできた楨文彦が、単に純粋な空間をつくただけではない建築となっていて、意外性がいと思いました。計画的には、地域性が大きく影響しているのですが、なんと体育館がない。静岡が、非常に温暖で、一年で一番寒い2月なのに外で体育の授業ができてしまう。そういうのが組み合わさってこの建築はできていると思います。まだ、空間のことについて言えてないのですが、ひとまず印象です。

ひとつ付け加えると、私は子供が小・中学生なので、公立の小学校、中学校に行く機会が多いのですが、やはり空間の質は加藤学園が圧倒的に優れています。見学の途中も言いましたが、良い歳の取り方をしていると思います。

野澤) 今日は天気も良く、日差しが良かったですよね。小学生って1年生と6年生で身体的能力がぜんぜん違う。都市型だとどうしても3階や4階になってしまいます。私が以前小学校を設計したときにオール2階建てにしました。加藤学園も2階建てで、かつスキップフロアが巧みに使われている。さらに2階建てを感じさせないような視線の通り方が工夫されている。どこに居ても、

2層に分かれている訳でもなく、曖昧な1.5層があったり、0.5層があったりする。水平のつながりが実は立体的な断面構成とあわせて巧みにつくられている。また空間的な見通しをつくることで、グラフィックも生きてくる。全てが計算しつくされた合理主義となっています。プランニング的には初期なので槇さんらしくない印象も受けますが、設計思想はさすがだと思いましたね。

恒川) ご案内いただいた校長代理の佐藤先生が語る建物に対する愛着が尋常じゃない、というのが非常に印象的でした。50年近く経っている建築で、たしかにかなり古くなってはいますが、当初つくられたコンセプトや教育の理念に強い自信を持っていて、その理念にこの建物がマッチしていることを確信している。だからこそ、ブレないで空間が当初の意図通りに使われている。こんな風にまで理念のままに使われている建築というのはめったにお目にかかれるものではない、というのがすごく印象的でした。実際に各部屋を見て改めてそのことを実感しました。当初のプランだけを見ると、元々8m角の教室が四つあって、その4つの8m角の教室間に通路もなければ、可動間仕切り壁も使われていません。実際使えるのかなと思いましたが、見事に使いこなされている。

■オープンスクールについて

恒川) 日本で最初のオープンスクールを実際に見てどうでしたか。私は仕切りのない空間で、同時に4クラスが使っている(1学年40人を二つに分け2人の担任が20人ずつを受け持ち、一つの空間で2学年分4クラスが同時に授業を行っている)というのは音の問題があるのではと思いました。しかし、実際授業を見て見事に使われているのに驚きました。こういう使い方は公立ではありえないかもしれませんが、あるんだなと実感しました。オープンスクールという形式や使われ方に対してどうでしたか(写真1)?

脇坂) 一つの室で4人の先生がそれぞれ喋っているながら、別々の授業が行われているのは衝撃的でしたね。講義の「建築計画」で取り上げてはいるものの実際に授業中の様子を体験したのは初めてかもしれません。完成見学会などでこういうふうに授業をやるんですよとは聞くけど、実際に授業が成立しているのを見て驚きました。佐藤先生は、子供たちは耳に入っていないのですよ、自分の授業に集中しているんですよとおっしゃっていましたが、教科書で見ただけでは実感できないリアリティがありました。

恒川) 学校の建築計画の大御所で(昨年亡くなられた)船越徹先生は、加藤学園は体育館みたいなスペースで、プランニングではないとおっしゃってしまし

た。また、シーラカンスはオープンスクールを設計するとき、音のことを気にして音の環境をシュミレーションして設計している。そういうのがなくて大丈夫なのかと心配だったのですが、見事に成立しています。その大きな要因のひとつは、カーペットだからですよね（写真 2）。音の吸収の問題もあるでしょうが、子供たちが床の上にプリントを置いたり、床に座ったり寝転がったりとできる。ずるずる繋がっていきます。上履きで普通のフローリングでは、あは使えないだろうと思います。

脇坂) 入口にカーテンがあって、あそこから仕上げが切り替わっているので、ここからは自分の居場所だと感じられる。廊下からずるずるいかない切り替えですごくいいですね。

野澤) 普通の小学校のような木の床でないことで、空間の使い方の多様性が広がるし、教室は教室、廊下は廊下ではないので空間が曖昧となり先生がいろんなことをやりやすいと思います。床の上に車座になって話そうよというのがすぐできそうですよね。普通小学校はメンテナンスやクリーニングでお金かかるから、タイルカーペットなんかダメなんですけど。あれは新しいですよ。



写真 1 仕切りのない4つの教室



写真 2 カーペット敷きの床

■教室の区切りや家具について

恒川) たぶんアメリカのオープンスクールを楨さんは参照されていると思いますが、アメリカはどうなんですかね？

脇坂) アメリカのオープンスクールは、スペースフレームによる巨大な空間を用意して、家具などで空間を区切っていく形式ですよ。加藤学園はヒューマンスケールで、全く質が違うと思いました（写真 3）。

恒川) 基本的には 8.1m×8.1m（それぞれのクラスの大きさ）っていう単位があ

り、4つの単位の真ん中に柱があります。空間的には通常の教室のスケール感があって、それが大きくも使えるし、小さくも使える。

野澤) 廊下、教室という仕切りではなくて、空間の有効率が下がるような廊下を取り込んで空間にしている。無駄のない計画ですよ。でもなかなかできないですよ、怖くて。

恒川) 当初のプランをみると4つの教室の脇に教員室があつて、そこに教員が居るといふ形だったのが、実際に使われ方を見ると、真ん中の柱のところに教員の机があり、教員が全体の教室の中に入っているという使われ方になっています。当初からそうだったのかはわかりませんが、一緒に家にいるという感覚になっていましたね。

野澤) 大きな家のリビングみたいな感じですよ。

恒川) 可動間仕切りをまったく使っていないですよ。竣工時の「新建築」の写真を見ると、ジャイアントファニチャーをいろいろな形に組換えて(間仕切りの的にも)使うというのが見られました。その家具は無くなっている。一方で今使っている家具は、台形の軽い家具になっていましたね。台形なのでいろいろな机のレイアウトができます(写真4)。

脇坂) 台形だから、配置をこうしよう、ああしようという、想像力を掻き立てる形式ですよ。

恒川) オープンな仕組みを上手く生かせる一つの要因かもしれないですね。



写真3 教室の入口に設置された仕切り



写真4 教室で使われている台形の机

■私学という教育体制について

脇坂) この仕組みが実現できているのは、一学年一クラスというのが圧倒的に大きいと思います。沼津という中規模程度の都市で、私学ということもあって、2層の規模で空間を構成できたのでしょうか。巨大になったら、あの質を担保

するのは難しいですよ。

恒川) 私学ならもっと大人数の一斉教育で稼ぎたいのではと思いますが、その理念が違うんですよ。今は増築棟でのオープンスクールの理念ではない英語教育のクラスもあるのですが(現在はオープンプランプログラムクラス/イメージプログラムクラスの二つのクラスがある)、一学年一クラスで2学年一緒にやっているというあたりが、ひとつポイントなのでしょうね。

野澤) 計算し尽くされてあの空間ができたのであって、そのまま他に転用しても上手くはいかないでしょうね。私学なので、それなりのクオリティの学生がフィルターにかかってきています。公立のようにやんちゃな子が居たりすると、その子だけのためにほかの授業が妨害されるリスクが高まると思います。私立でかつ、それなりのレベルの人たちが、選抜されて入ってきていることがオープンスクールをうまく成立させた要因の一つかなと思います。

脇坂) 空間を使いこなすリテラシーが多少なりとも備わっている生徒ですよ。

野澤) 緒川小、池田小は見てないですけど、そっちも見るとまた違った知見が出るような気がします。そのふたつは公立なんですよ？

恒川) 田中・西野設計による緒川小の東浦町はそういう理念があったのですが、最近はわかりません。できた当初はすごく話題になりました。

脇坂) 公立なので人が変わって理念が継承されたかはわかりませんね。

恒川) 私学は異動がないから、基本的に継承されていくのが大きいですね。

脇坂) それは研究の比較対象として面白いですよ。

野澤) また違う部分が見えてくるかもしれない。継続して来年も見てみたいです。

■空間構成や空間の質について

恒川) 空間全体の構成や質の話をしていきましょう。まず、槇さんらしくはないですよ。私は名古屋大学の豊田講堂を日常的に見ているし、最近の槇さんの建築も大半を見ているが、槇さんのこの時代の建築は見ていないかもしれません。システムチックに中庭が挟まれてクラスターが切られていて、かなり説明的な平面構成をしています。それを空間の質として感じさせないですよ。中庭は小さいけどすごく効果的です。中庭自体狭いし、わいわい人が入る場所じゃないんだけど、光の当たらないところに光を入れる効果は絶大です(写真5)。到着した朝の早い時間と帰る昼ごろでは、中庭への光の入りがずいぶん違いました。真ん中のスペースがずいぶん明るくなっていましたよね。また、もと

もと敷地はフラットで、あえて段差をつくる必要はなかったのではとも思いますが、光の取り入れ方や、場所のテリトリーをどうするのかなど、うまく視線の操作をされていますね。

脇坂) 槇先生の建築は、洗練された空間、というのが強い印象でした。今回、小学校ということで平面が図式的に強い建築という印象で見に行ったら、全然違いました。断面的に上から光を入れているとか、床レベルを下げて、また上げてというのを小さいスケールの中でやられている (写真6)。



写真5 光を取り入れる中庭



写真6 視線の抜けを生み出すスキップフロア

■具体的な場所について

恒川) 具体的に場所についてはどうでしょう？

野澤) 特に特別教室棟 (普通教室棟と特別教室棟から構成されている) の2階部分の天井の高さは良かったですね。音楽室と図工室はまた違うつくり方になっていて、光の入り方を目的に応じてちゃんと使い分けていますね (写真7)。そこがすごいです。

恒川) 建物がコンパクトですよね。あとで幼稚園などを増築しているくらいだから、もう少しのびのびとつくっても良さそうなのですが、どうしてなのかわかりません。また富士山をバックに建築を考えそうなものなのに、外向きに考えられた建築ではないよね。槇さんって、周りの環境を上手く取り込んだりするのに、この建物はそういう感じはしないですよ。

野澤) 静岡では富士山の軸を第一に考えそうなのに、全く軸性は感じられませんでした。あれは意外でした。

脇坂) エントランスの部分だけは片流れの大きな屋根としている (写真8)。あれは平面から思いつかなくて、シンボル性が強い要素でした。槇さんの建築からは、あまり想像がつかない造形。屋上じゃなくて、屋根にしたんですねと。

野澤) あの斜め屋根の素材の縦ハゼ葺きの色は槇さんにはないモチーフですよ。

恒川) エントランス入り口のサッシのフレームの組み方(入り口の扉の上は太陽をモチーフにしたサッシのフレームが組み込まれている)も槇さんにはないですよ。その後もその前も。

野澤) 実験したのでしょうか。

恒川) あのスーパーグラフィックもそうですよね(写真9)。あの時代の他の建築家たちの磯崎さんとかはやっていたけど、槇さんにはないですよ。見たことない。

野澤) 見たことないですよ。

恒川) カラフルな色使いにしてもポンピドゥーじゃないけど、ダクトまで色を塗っているのは槇さんらしからぬ建築です(写真10)。

野澤) 槇さんというと白とかシルバーとかメタルといった感じですよ。

脇坂) 巨匠のつくる建築の作家性という設計方法ではなく、所員の意見を入れてやっていたのでしょうか? 模索の時期だったのかわかりませんが、だけど、あの屋根があるから、裏側の内部の天井面に反射する水盤の効果が生まれています。斜め要素があって良かったと思います(写真11)。

野澤) 非常にコンパクトにつくっているにもかかわらず、エントランスのホール部分はだいぶゆったりとしていて、下手すると無駄に見えてしまう。微妙なバランスで、実は無駄じゃないんだということが後からわかりました。

脇坂) エントランスが体育館であり、講堂でありということですよ。プランニング的にも実験的ですね(写真12)。

恒川) ホールの後ろの光を取り入れるトップライト(エントランス入ってすぐのホールの後ろは吹き抜けのギャラリーでトップライトが設けられている)のところは半分下がっていてギャラリーになっていて、そこが効いている。両側に中庭があることも効いています。あの場所がこの学校の中心なんだという感じがすごくしますよね。

脇坂) そうですね。

野澤) 屋上から見た時、トップライト自体の大きさがスケールアウトしていると思ったんですけど、下から見ると必要な大きさで、あれぐらいの光の量が必要なことも初めから意図していたことがよくわかります。



写真7 舞台上のトップライトから光が落ちる音楽室



写真8 エントランスの片流れ屋根



写真9 天井や壁に施されたスーパードグラフィック



写真10 カラフルに塗られた配管



写真11 エントランスの天井面に反射する光



写真12 エントランス前の講堂

■建物の現状について

恒川) ファシリティマネジメントの専門家からすると、もうちょっと手を入れて欲しいです。鉄筋が露出していたりコンクリートが爆裂していたり、屋上防水

がちよっと危ないなと感じました。内装にしてもう一回塗り替えてもいいのではと思います。

野澤) 内装でしたら、学生たちに愛されているのでワークショップ的にやるのもありかもしれないですね。ただ躯体のメンテナンスは計画的にしていかないと。良い建築は残していきたいですね。

恒川) オープンスクールとしても記念碑的な建築だし、あの空間があるから、あの学校は運営できていると思います。これからも長く使い続けてもらうためにもメンテナンスをしてほしいですね。

■一貫校における加藤学園暁秀初等学校の位置付けについて

脇坂) ところで、増築棟はオープンにしていなかった。創始者とともに運営に関与されてきた佐藤先生は、オープンプランがいいと信じて、今も運営されている。なのに増築棟は、クローズドな形です。増築棟では当初からの理念は継承されてないのか、それとも意図的に変えたのか。そこは気になります。

恒川) 幼稚園から小学校、中学校、高校まであるわけだから、ひょっとしたら中学校や高校だって継承してオープンでやっただけいいわけですね。ただ佐藤先生は小学校だからこそ、こういう考え方なのだとされていた。また、オープンプランプログラムクラスの児童は論理性が身につくことについて、イメージプログラムクラスの児童は英語教育をする。目標が違うのでしょうが、オープンなのがすべての答えにはならないということですね。幼稚園から小中高一貫だから、その後の中学校や高校でどういう試みをしているのか見てみたかったですね。

野澤) 小学校だけ楨さんの空間で育った子供達と、同じ学園の運営だけでもそうではない空間で育った子供達を対象に、建築がどういう形で、最も多感な小学校時代の人間形成や学力吸収能力に影響しているかを定量的に測ることができそうですね。研究的な目線になってしまいますけどそういうのも面白いですね。

恒川) いい議論ができましたね。

全員) とにかく良い建築でした。

以上

2019年2月28日(木)

静岡県資生堂アートハウス視察、座談会

恒川和久（名古屋大学）、脇坂圭一（静岡理工科大学）、野澤英希（愛知工業大学）、内山実保（名古屋大学恒川研 M1）

恒川）1978年に開設した谷口吉生氏設計の資生堂アートハウスです。私は学生時代以来30年ぶりくらいで初めてに近い感覚がありました。脇坂さんはトレース演習の対象にしているそうですが、改めて印象としてどうですか？

脇坂）私は初めて訪れたのが数年前で、年に1、2回行っています。回数としてはそんなに多くは無いです。新幹線沿線の平坦な土地に盛り土を作って、アプローチ動線を隠しながら、造形的には円と四角という純粋な幾何学で平面的に場所をつくりつつ、動線として登って、降りて、また登ってというように、平面と断面の操作で空間を構成している。でも、実際、その構成が図面を見ているだけではなかなか分からない。空間を体験して初めて分かったと思える建築だと感じています。

野澤）私も恒川先生と同じで、記憶にないくらい久しぶりでした。とは言いつつも、新幹線から割と頻繁に見ていましたので、ようやく来られて久々の再会という感じでした。今回ほとんど初見に近い印象でしたね。最近の谷口建築を割とほかにも見ているのですが、その原点を見るにつけて、やはり色々なところに彼の作風やこだわりも含めて感じました。設計は、数をこなしていくうちに、ディテールが洗練されていくのですが、最初からある一定の水準に至っていたことを久しぶりに見て改めて強く思いました。やはり、いま美術館の巨匠と言われていますが、流石それに値するものが既に若い頃から、出ていたんだなということを感じました。

恒川）たまたま最近谷口吉生による美術館の形態分析をする修論の副査をやったんです。それで論文や図面を見る機会があったのですが、資生堂アートハウスは最初の作品にも関わらず完成度はきわめて高いけれども、それ以降の谷口氏の美術館建築とは違う印象もありました。そこを改めて今日確認できました。展示スペースの作られ方とか、そこへの光の入り方でしょうか。後の作品は展示スペース自体は閉じて、動線空間を開けていくスタイルなんですけど、それらとは違って展示空間自体に光が入っているところが、これを踏まえて次の作品

があったのかなと思いました。



写真1 展示スペース



写真2 展示スペース

空間構成について

恒川) 正方形と円形を組み合わせたプランが印象的で、学生時代に、どうしてこんなふうになっているんだろうと図面の中を歩いたりしました。実際に訪れると斜めに刺さっているアプローチが相当効いています。その後の谷口氏の美術館建築も、アプローチですんなりストンと入れることは無くて、折れ曲がって入ったり、くぐって入ったりというような操作がありますが、この建築も、新幹線に沿って平行でも直角でもなくて斜めに入れていて、主空間とずらして入れています。駐車場から歩いて向かうときのシークエンスの現れ方とかも、さすがだなと思いました。

脇坂) 先ほど恒川先生が「刺さる」とおっしゃっていましたが、まさに真ん中に刺さっていますよね、アプローチが。一般的に、美術館は企画展示室と常設展示室でチケットが異なり、ある一定以上の規模になると、全体を空間として理解するのはなかなか難しい。ところが資生堂アートハウスは、1500 m²ないくらいの規模で、かつチケットの区分も無く、そもそも無料ですが、それで四角と円の両方の空間を体験させるということが、真ん中にアプローチを刺すことで実現できているのかなと思いました。

野澤) よもすると、幾何学的な形態の建物はどこがアプローチなのか分かりにくくなったり、正面性が得にくくなるのですけれども、先ほど恒川先生も脇坂先生もおっしゃっていたように、斜めの軸線を入れることによって自然にそれを解決しているというところが、とても考えられていると思う。やはり谷口氏の作品全般に言えることだと思うのですけれども、非常にシンプルでミニマ

ムなディテールや、形態として四角とか単純な幾何学が多いのですが、それを実際に体験するとまったくその単純さを感じさせない豊かな空間だったり、複雑な動線だったりします。その単純なものを使って如何に多様なシーンを作り出すのかということに、彼は非常に長けている。それは、特に豊田市美術館みたいに大型化・複雑化していくと、施主の要望も多くなりなかなか構成が難しいのですが、この資生堂アートハウスは、先ほど脇坂先生がおっしゃったように1500㎡前後と非常に小さいので、それに徹して作ることがうまくできています。シンプルな丸と四角のみから、本当に複雑な空間・感動的なシークエンスが出てくるところがすごいと思います。



写真3 アプローチ

恒川) この建物は、谷口氏が慶応の機械学科を出て、ハーバードの建築で修士をとり、丹下健三事務所を経て、独立した後、最初期の作品です。『谷口吉生のミュージアム』というMoMAが出した本の論評の中で、谷口さんがハーバードにいた時代に、ル・コルビュジエのカーペンターセンターができていて、資生堂アートハウスは、その平面の影響がみえると指摘されています。たしかに両側のマスに斜めにアプローチが刺さっています。このアートハウスだけが、コルビュジエとか丹下氏の直接的な影響を受けている感じがします。この後の作品での谷口氏らしい平面やディテールとはちょっと違うように思います。たとえば、幾何学的な形態の操作といっても、円と四角を組み合わせるものはないし、雁行はあるけど、斜めに刺さる形もないし、構成の違いを感じました。それはさっきも話した、展示空間と収蔵空間と動線空間の使い分けですね。ここでは動

線と展示空間が一体的になっているけど、それ以降の土門拳記念館、豊田市美術館や丸亀（猪熊弦一郎現代美術館）では、離すんですよね。展示空間に入るまではガラス張りで、展示空間に入るとホワイトキューブになるという作品がほとんどだけど、これはそうではない。もちろん展示品がどういうものかという影響もあると思うんですが、谷口さんも若かったのかなと思えて面白かった。脇坂）ちょうど私の博士論文が美術館のシークエンス空間を解析していたんです。資生堂でも、視線の先に壁面が回り込んで行って、その先が見えない状態で、折れ曲がりに来るとその先がだんだん見えてきて、という展示空間のつくられ方になっている。遮蔽縁から、徐々に情景が見えてくる、というシークエンスの展開ができています。そういう視覚的な効果が、やっぱり図面では読みとるのは難しく、体験して初めてわかる建築だと思います。

恒川）高さの作られ方も絶妙ですよ。収蔵庫のレベルが少し下がっていたり、展示室に上がるところが1200mmくらい上がっていたり。ああいうのは、普通ないですよ。最初の円形の階段、あれは問題？



写真4 エントランスから展示室へ上がる階段

野澤）そうですね。やはり時代的に今なら成り立たない箇所も色々あったり、現状からすると厳しいところもあるのですが、今あの空間構成をあのボリュームで作ろうとすると、これ以上の建築的な空間の負荷がかかり、—このような豊かな空間はつくれないのかもしれないという気がします。先ほど高さ方向の話がありましたけれども、単純な幾何学的な形態を組み合わせるだけでは空間は多様にはならず、それを絶妙なレベル差を使いながら、いろんなシーンから見せる視線の違いだとか、見え方だとか、計画的な配置やプランニン

グも含めて絶妙に解いているなと思う。これはなかなか平面図だけ見ているとピンとこないんですけども、今日脇坂先生からいただいた貴重な断面図を見るとそう思いますね。これだけフラットで、かつ土工事が多いと当然工事のコストが上がるんですけども、それ以上に空間が豊かだということを、多分ちゃんと施主にもプレゼンテーションして、それ相応の建築費のコストアップ分も、それ以上の上質的な建築空間ができるということで説得しているのでしょう。それも建築家の力量の一つなので、やはりすごいなと思いましたね。

脇坂) 平面図だけでは読みきれないと言いましたが、一方、断面図を見たときに、ハイサイドやトップライトをどうして使わなかったのか、と思いました。壁際からウォールウォッシャーで光を入れたら、かなり印象的なアプローチになったと思います。静岡は、日照時間が非常に長いということを考えると、美術館において光をうまく使うというのは検討することだとは思う。



写真5 天井の照明

恒川) こちら側の円形の帯になったガラス窓が強烈なので、その背面にあるハイサイドはむしろ邪魔になると思ったのかもしれないですね。



写真6 円形の帯になったガラス窓

脇坂) 外の景色に視線を向けると、彫刻があって、緑があって。やっぱりそちに意識を向けよう。

恒川) 四角い展示室の円形の中庭は閉じちゃってましたね。当初は開いていたんでしょうね。円形の展示室が外側に開くのに対して、反対側は内側に開いて、同じ円形を内側から見るのと外側から見るという体験をさせたかったのでしょうね。あれが閉じちゃっているのは、建築としてはやや残念ですね。

野澤) そこはやはり、入ってまず気になりましたね。これだけ長い間使っていますと、当初の設計の意図と使い方がずれていくのは、いたしかたないかなと思います。ただ、小さい丸の空間の中に置かれていた彫刻の作品もありましたけれども、見にくかったり、ガラスに貼ってあるフィルムも、熱射を軽減するためだと思うのですが、昼間だと外がなかなか見えづらかったりと、あの辺はちょっと残念なところでした。

脇坂) 話は少しそれるのですが、一企業が無料であそこまで美に対して開いているというのはすごいことです。設計者として建築家を起用していることも。それなりに古いはずなのにあれだけ綺麗に使われているというのは、建築にとって幸せな姿だと思います。

恒川) 資生堂という企業は、昔から文化度が高いというか、社会的貢献への意識レベルが高いですね。(名誉会長の) 福原義春さんは日本の企業文化の価値を高めた文化人だし、アートハウスもそういう系譜の中に位置づけられると思う。この建物の後に企業展示館ができたので、たぶんこのアートハウスにもともと展示されていた資料のうち、たとえばCMとか、ポスターとかそういうものがそちらに移ったので、こちらはアート色が強くなったのではないですかね。

展示されるものがファインアートに寄ってきたので、直射光が入っても良いような展示品だったのが、そうでなくなったことが、改修につながったのではないかなと想像します。ただ企業展示館の方も谷口氏に頼んでほしかったですね。



写真7 資生堂企業資料館 外観



写真8 資生堂企業資料館 外観

野澤) そうですね。谷口作品を見た後に企業展示館を見る気力が湧かないっていうのは残念ですね。

恒川) 展示品は多分面白いと思うんですけどね。

野澤) そうですね。グラフィックデザインとしての価値は非常にあると思います。メナードもそうですしポーラもそうですが、そのような文化のある企業の業種の中でも、建築と美術と彼らの企業理念が合致するような、まさに名作だと思います。

2019年2月28日(木)

静岡県掛川市庁舎視察、座談会

恒川和久（名古屋大学）、脇坂圭一（静岡理工科大学）、野澤英希（愛知工業大学）、内山実保（名古屋大学恒川研 M1）

恒川）1996年に竣工した日建設計による掛川市庁舎です。まず、第一印象や、実際に体験してどのような感想を持ったかというあたりからお話を伺います。野澤）資生堂アートハウスと同じで、新幹線の中からも非常によく見える立地ということで、遠望には見つつも、実際に中に入ってみた空間の体験をしてからの印象としては、やはり光が入るという意味での開放感もそうなのですが、やはり人と人との目線が、どのフロアにいても交錯して、よもすると閉鎖的な縦割りの部局が多い市役所の従来の概念を、まさに建築計画がそれを取り除いたというような印象を受けて、驚きました。また、掛川市という市のボリュームだからこそ、このくらいの形で一つの大きな空間の中におさまって、訪れる人もそこで働く人も一体感を、建築の形態が醸し出しているのかなという印象でした。



写真1 内観



写真2 外観

脇坂）大きなアトリウムが段々畑状になっている明快な空間構成の中で、それぞれの部署の作業の様子が一望できるような、市民の生活の基盤を担っている公共組織というものが視覚的に表された建築だなと思いました。逆に、そうした見せ方は、この空間構成だからできたということを実感し、改めて感銘を受けました。一方で、アトリウム空間の中で執務をする職員にとって、特に空調

的な性能はどうなっているのかは気になるところです。上階の開口部が手動で開閉可能とか、ロールスクリーンで遮光できるようにしているとか、対策は取られているようなので、なんとかなっているのでしょうか。夏の環境については、別に伺ってみたい。

恒川) 私は建築計画の講義でオフィスビルのお話をしていますが、これは講義に出したい重要な建築作品です。しかし、実は今まで体験していなかったのですが、写真で見るよりも透明感があるなという印象でした。透明感があるというのは、ひとつは南北両側がガラス張りで、これは新幹線を意識したというのもあると思いますが、明るいですね。今日は雨が降っていましたが、照明いらなくらい明るい。もうひとつは、空間構成としての透明感です。生涯学習テラスと呼んでいる、各執務室から飛び出てきた市民も使える打ち合わせしたりするスペースが非常に効いていて、これがあることで、市役所というのは市民に開かれた場所なんですよ、誰もが訪れられる場所なんですよといったメッセージとして発信されているのがよくわかります。できて20年以上経つわけですが、現時点でも最新の市庁舎だと言える建物だなと思いました。

空間としてのこの形式はどこから生まれたのですかね。一番大きいのは、もともと小山があったということでしょうね。敷地の西側の山をあまり掘込まないで、そのままひな壇状に使っていくということが、新幹線に並行して大きな立面を向け東西に長い配置にすると決めた時点で、この構成が生まれたのだと想像しますが、ハマりましたよね。(当時副社長だった日建設計の) 林昌二さんは、各執務室から近くに緑が見えることが大事だとも仰ってますね。もう一つ構成として特徴的なのは執務室を内側に追いやって、外側を廊下にしたということですね。南北両側のガラス張りの鉄骨のはしごみたいな構造がある部分を全部廊下にしたっていうのは、オフィスの形態としてほとんどない画期的な構成だと思います。通常は、窓際族と言われるように、窓側に役職者が並びますが、ここでは最も窓から遠い内側に役職者が並んでいて、一番外の窓側を動線にしたという、このあたりの計画のされ方も革新的ですね。構造的な話も含めて、この断面と平面の構成がうまくマッチしていることが、この庁舎の成功の要因だと思います。

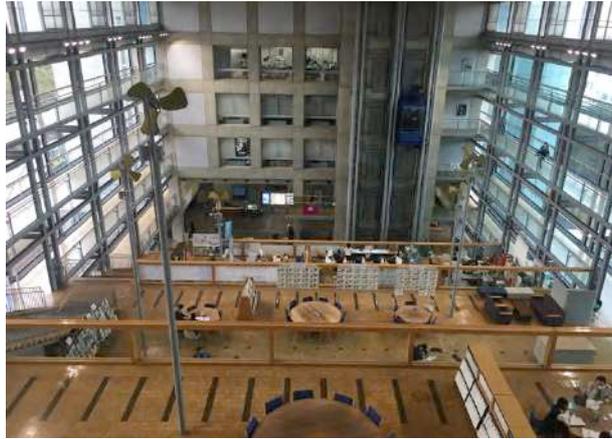


写真3 南北両面のガラス張り

恒川) 野澤先生は、日建設計の名古屋オフィスにおられ、この建物の設計者達を実際に知っていて、内情もよくご存知なのではないかと思うのですけれども。野澤) なかなか立場的にコメントしにくいのですけれども、そういったことを抜きにしても非常にいろんな意味でチャレンジングなことをして、いま恒川先生がおっしゃったような、一番環境のいい光の入る緑を見ることができる場所が、今までは役人が占領していた部分を市民に開放して、今までの主従を逆転させたということがまず一つ。ただ、プランニングで解決するのではなくて、建物の構造として両側の、今回の特徴ともなっている廊下を持ってくる今までであった既成概念を覆す市民への開放などを含めて緻密に計算されて、かつそれを大組織事務所の長所であるという、いろんな知見を集合して、大きな吹き抜けや構造の特殊な技法を使ったり各種のシュミレーションを行うというのは普通はなかなかできないのですけれども、相当複雑な次元方程式を解いたといったといところが特筆にあたいするのだと思います。

空間構成について

脇坂) 市庁舎は、市民の生活を担う場としての象徴性が求められると思うのですが、一方でこの立面あるいは断面を見たときに、ユニバーサルな柱梁の矩形を用いながら、象徴的な造形が生み出されている。ユニバーサルなもの象徴的なものが合体しているという意匠的にかなり面白い、ユニークな建築になっていると思います。柱梁がRCだけだったら、ユニバーサルな印象が強くなるのだけれども、間のスパンでは鉄骨をダブルに組んだスレンダーな柱で置換することで透明感が生まれ、向こうとこちらの景色を繋げている。周辺環境を取り

込んだうまい解き方だなと感じました。



写真4 鉄骨柱

恒川) 断面の構成をそのまま構造体の違いであらわしています。あの鉄骨柱を200mm くらいの耐火被覆なしのH鋼で組んでいます、こんな大空間をこんな華奢な構造でもたせているのも驚きだし、そこに至るまでには難問がたくさんあったのだろうと想像しますが、やり方が鮮やかですよ。

野澤) やはり、かなり技術力が高い。意匠のみでなく、構造的にも防災的にも本当に高度なプロ集団だからこそできる。アトリエではなかなかできないようなデザインだなという気もしますね。そういう意味で真似ができないので、他にも増えないと思います。

恒川) こういうひな壇って、他にもあって良さそうなものだけれど、この20年で、はこだて未来大学や(建築学会賞をとった)ROKIの研究所くらいしか頭に浮かばない。本当は、オフィスにこそ庁舎にこそある形式だと思う。林昌二さんは「庁舎はオフィスではない。シティホールである。」と仰っていて、磯崎新さんが東京都庁コンペの時に「役所はシティホールである。広場である。」と言ったのと通じます。市長がエレベーターの前のご挨拶されるのをひな壇でみんなが見ると言う話がありましたが、林さんはここで結婚式やってもいい、そのくらい市民に開放された空間であるんだということを言っています。そういう理念がすみずみまで行き渡っているなと感じました。それも特殊な材料を使っているわけではないですよ。たとえば石張りとか華美なものではなくて、鉄とかコンクリートとか木とか、ありふれた材料でこうした空間をつくるのはすごい力だなと感じます。

野澤) ユーザーが市民なので、若い方からご老人まで幅広い方が利用する。ただどうしても機能が多層に分かれれば分れるほど、空間的な認知がしにくくな

るということで空間認知度の低いご年配の方などに、「何とか課は青のサインの4階のあそこですよ」と指差して、「ああ、あそこね」と視覚的にも認知しやすいし、市民にとって優しい空間なのかなという気がします。

脇坂) ミックスラボと通じるところがあるのでしょうか。いろんな部署や領域が壁を隔てずに繋がり、立体化されたミックスラボの形式という。



写真5 階数や課のサイン計画

執務室について

恒川) 執務室の真ん中の柱に挟まれたコピー機とか置いてあるところがもうちょっとオープンだといいいですね。

脇坂) コア空間の動線として、あそこでももう少し回れて、それから外側でも回れるというダブル動線になっているといいのかなと思いました。

恒川) それとやや混雑したところがありましたね。掛川市が合併して市の職員も増えたとのことでしたし、教育委員会を外に出たということで、全職員を収容できない規模になってしまった。一つ屋根の下に職員がみんないるという感じはちょっと薄れたのかもしれないですね。

野澤) なかなかエクステンションににくい建物なので、形態的にもそうですけれども、やはり38条をかませていると増築する際に厄介なんですよね。この形態で一度許可が下りているので、それ以外の用途が入ると、既存訴求とか法的にすごくめんどろになるんですよね。特殊解なゆえに、それ以降のエクステンションなりコンバージョンとか、リノベーションするときの足かせになるというデメリットも実はあるんですよね。課長級・係長級が通常はガラス側で離れて座っていますよね。でも今回中央側にあるので、他部署の役職のコミュニケーションの物理的な動線が近くなっているから、役所の縦割りの弊害もなく、すぐに相談に行ける。トップの物理的な距離が近くなったというのも、もし効

果に現れていたら、それはそれで面白いのかなと思いますね。

恒川) ひよっとするとあそこが実はいい隠れ家になっているかもしれないね。ある意味この形は職員が市民の目に晒されているとも言えるので、ちょっとコピー機があつたりするところは、職員同士で内輪話ししたり隠れたりっていう場になっているかもしれないですね。それはそれで面白いけれども、やっぱりあそこはもうちょっと開けていた方がオフィスとしては良さそう。

野澤) 空間的なしつらえとしてまた物理的な空間の広さとしてなかなか窮屈な感じがしましたね。もうあと1スパンくらいこっちに広がっていることができたなら、もう少し豊かな空間になったかもしれないですね。

議場について

恒川) 議場については、「あれは何だ? 効果」って話がありました。いろんな人から「あれは何だ?」と聞かれるから「あれは議場です。」と答える、話のネタになる議場です。



写真6 議場 外観

脇坂) あれは象徴性の一つなんですよね。

野澤) 一最高決定機関がよもすると密室化するのを、あえてシンボリックに可視化して、外から中が見えるわけではないんですけども、そこでみんなが集まって話し合っているんだといった建築の形態が見えるというのはすごくインパクトがありますよね。

恒川) たしかにすごくお金かかっていますよね。アーチをトラスで組んで表面はアアルトの木の曲げ加工みたいなね。

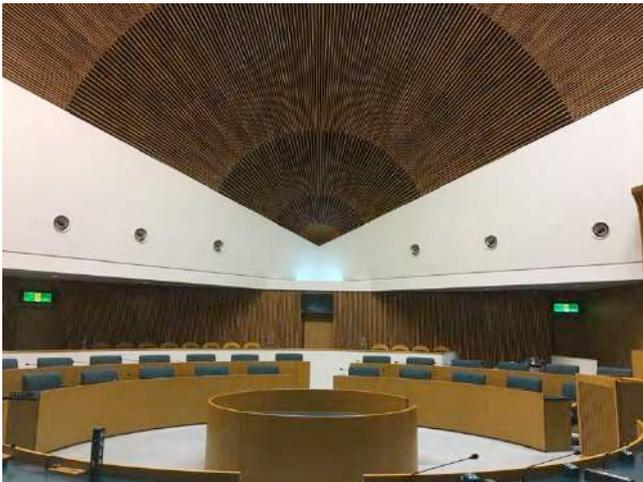


写真7 議場 内観

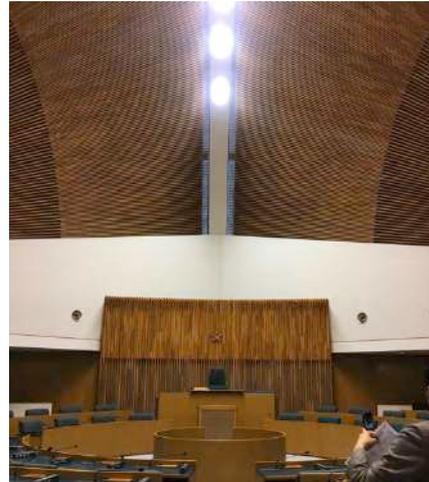


写真8 議場 内観

野澤) 天竜杉ですかね。

恒川) 大変な手間がかかってそうで、空間としてとても贅沢ですよ。

野澤) シンボリックなあの空間の中で議論している議員さんも、モチベーション高く、自分が市民の代表だということで背筋もしゃんとのびるのではないのでしょうか。

恒川) 昨今の議場は、隈研吾が設計した長岡市役所のように、低層部にオープンに、より市民に近いところに議場があるというのがトレンドなので、今の時代とはちょっと違うかもしれないですね。

野澤) これがガラス張りでできていたらまた面白かったかもしれないですね。

恒川) そしたらもっとお金がかかりますね。(笑) 上に議場だけではなくて議会の各委員会室とか党派別の控室とか全部一番上にあるので、ここが開かれた庁舎、透明な庁舎の中では、やや権威的な感じはありますね。

施設・設備について

脇坂) ざっと計算すると、61億で1万3千㎡で、平米で38万円、坪で124万円。無茶苦茶高いわけではなく、そんなに安いわけでもなく。

恒川) 基本的には役所の建物にも補助金があったり、面積基準があったりと制約はあるので、そんなに高いものをできるわけではないと思うけれども、お金がかかっている感じもしますよね。(笑) でも20年経ったとは思えないメンテナンスが行き届いている感じがしましたね。

脇坂) 公共建築であそこまで綺麗に使われているのは、幸せな歳のとり方です

ね。

野澤) ちょうど 20 年経つと設備の更新だったり、屋根の防水のやり替えだったり、もうちょっとくたびれ感があるんですけども、そういう意味ではまだ 10 年くらいという感じですよ。

旧・掛川市庁舎について

恒川) たぶん掛川市でも、公共施設総合管理計画とか、中長期保全計画とか作っているでしょうから、この庁舎をどうするのかって策もあるんだろうけど、そういった話はお聞きしなかったですね。前の庁舎はやはり林昌二さんの設計で 1956 年に作られたそうですが、この庁舎ができて、40 年で壊されちゃってるんですよ。前の庁舎は復元されたお城の近くにあったんだけど、(写真を見ると) 丹下健三にも通じるこれぞ日本のモダニズムって建築です。内部のコンクリートの丸柱に型枠の木目そのまま出ている、本物の木みたいに見える。

野澤) ここなんかホテルオークラのロビーに似ていますね。

恒川) この旧庁舎が壊されたということで、林さんは建物の寿命について相当考えるようになったそうです。そこで、たまたま新庁舎にも林さんが関わることになって、長く使い続けられることを考えたんだと思う。たぶん長く使い続けられる建物になるのでしょう。

野澤) 設備的にも更新しやすいように、日建設計としていつもそういうところは気にしているので、大型熱源も配管も EPS も給排水管も含めてスペーシングしているはずですから。どうしても更新があるのは仕方ないことですから、そういったストレスもなく更新して末長く使っていけるのではないかなと思います。

脇坂) 行った後に感じる爽やかさがあると思うんです。人口でみると掛川よりは少ない、空間的にはもっとハンドリングできるはずであろう、近隣の袋井市役所に行った時には、空間として心に響く感覚はまったく感じなかった。でもここに行った後の、感覚的というか、いい時間を過ごしたなという後味の良さはすごくあるんですよ。論理じゃなくて、身体的に感じる気持ち良さがあると思うんです。そういう意味ではこのレビューとしては批評的であるべきなんだろうけれども、気持ち良さを僕は感じて、それって設計者が込めた思いがちゃんと伝わっているか、継承されているかどうかだと思うんですよ。感じる空間と感じない空間っていうのは。

市民の誇りとなる市庁舎

恒川) 市民が誇りに思えるって、そういうところから生まれるんだらうという気がします。この庁舎の設計理念に「市民の誇りとなる建築」ってあります。ちょっと前の建築学会大会のシンポジウムで元・長岡市長が、隈研吾さんの市庁舎をつくられたときの市長ですけれども、とにかく市民の誇りとなる市庁舎を建てるのが大事なんだと仰ってました。たしかにそれはあると思うんです。庁舎も建て替えブームだけでも、市庁舎を建てる方々には、もう一回こういう建物を見直して考えてほしいですね。こういうことを実現させられるプログラムを作る役所なり市長が非常に大事ですよ。

野澤) 本来そうあるべきですよ。なかなかないですけど。建築のことがわからない人がほとんどっていうこともあるんですけど、特に公共建築の場合は、市長なり知事なり、イニシアチブを取れる人がいないとできないのかもしれないですね。でもそうすると、そうじゃないと諦めるのかっていう悲しい話になってしまうのですけれども。でもそれを超えるような役所の部局の人の努力が…なかなか難しいですよ。責任を負う人がいないとなかなかこういうのってできないですよ。

脇坂) 掛川市役所のホームページを見ると、市庁舎についてデータが載っていて、市庁舎は「市のシンボルとして誇りになる建築」と書いてある。ここまで書いてくれるのはなかなか無いんじゃないでしょうか。建築に対する信頼が無ければこうは書かないよなど。

恒川) そうですね。ある意味、市のお宝の一つですよ。

脇坂) 欧州では、市庁舎が観光地の一つになっている例が多いですよ。先ほどの結婚式もそうですけれども、街の建物として市民の誇りになる空間性を持ち、そのことを掛川市も謳っていて、両者相思相愛になっているように思えました。これは設計者冥利に尽きますね。

野澤) 本当に見てみると、文句をつけるところが普通はたくさんあるんですけども、ほとんどなかったですよ。

脇坂) 回っていったときに、「いやあ、夏は暑くてさ」とか全然出てこなかったですよ。

野澤) 個人的な暑い寒いという意見はあるものの、総論として、この建物だからそれも許せちゃうかなというニュアンスの意見だったような気がします。確かに大空間の空調や光とか熱はコントロールしにくいというリスクをはらんでいるんですけども、それを超える空間的な形態で打ち消されているというか。

そこは計算していたのか、結果としてこうだったのかはわかりませんが、そういった印象を受けました。

脇坂) 日建設計がつくられた記録集の解説にも書いてありますが、議場のこの形は手と手を合わせた合掌を造形化(写真9)しているという、設計者のそういう想いが市民にちゃんと伝えられていて、ああそういうことなんだと理解されているから、多少の不具合があったとしても、許容されているのかもしれないですね。

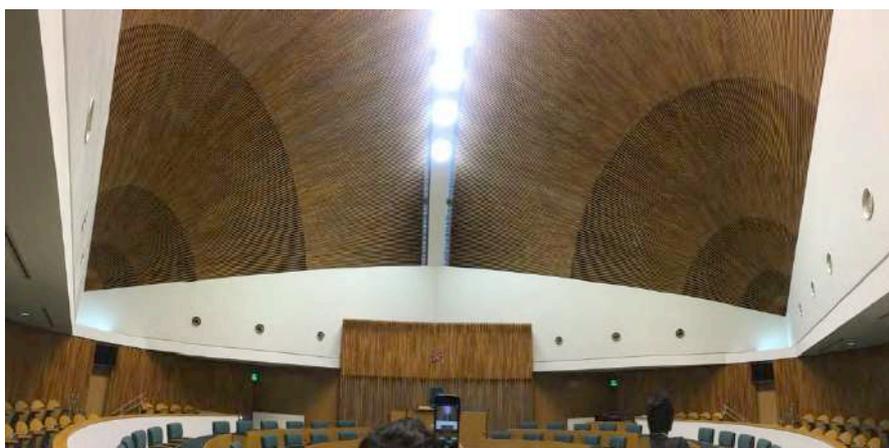


写真9 議場 内観

恒川) 野澤) そうですね。

脇坂) 理念がちゃんと継承されているということですね。ありがちですが、担当者が変わって、当初の理念がうまく伝わっていないとかではなくて。

野澤) 空間作りに関しては、素人の人がわからないくらい相当な技術が詰まっているんですけども、直接的に見て、誰もがわかるっていうのがいいですね。形にせよ、空間にせよ、実際に利用する場合においても、建築家が云々語らなくても、みんなスッと腹落ちするようですね。

脇坂) わかり易さっていうのはいいですね。「お茶が特産の掛川の建物だから、お茶畑を建築化したんだよ」という。

野澤) 段々畑に霜取りファンがあつてとか。



写真10 霜取りファン

脇坂) そういう、一般の人が語れるっていう。

恒川) うん、良かったですよね。

脇坂) 野澤) はい。